



NPO法人
ヒマラヤ保全協会

IHC-JAPAN: The Institute for
Himalayan Conservation Japan

Shangri-la

シャングリラ



2024年度
会員総会報告



100円でヒマラヤに1本の を植えよう!

One coin One tree on Himalayan, tomorrow will be in your hands.

現 地 報 告

IHC 会長
京都大学 特定准教授
相馬 拓也

サクラ・プロジェクト第1弾が始まりました！

ヒマラヤ保全協会は本年、川喜田二郎先生のパウダル村での活動から50周年を迎えました。その記念事業のひとつとして、日本のサクラをネパールの農山村やポカラに植える、サクラ・プロジェクトの第1弾が5月に始まりました！

手始めに、日本でサクラ苗を100本調達し、ポカラに輸送してきました。日本のサクラは園芸品種も合わせると、300種類以上あるとされています。この第1弾活動では、ネパールの気候に適した品種を特定するために、開花時期や花付きなどが異なる19種類の品種を持ち込みました。成田空港での植物検疫で厳しい検査を受け、何とか機内に運び込むことができました(図1)。

カトマンズからは、手配しておいたワンボックスに積み込んで、陸路ポカラへ。さすがに3日間の行程を耐えた桜苗は、弱っている苗木もありましたが、ポカラの新設ナーサリーですぐさま水を吸いあげさせて、そのほとんどが元気なままで植樹祭を迎えることができました(図2)。

サクラの植樹祭は6月5日の世界環境デーに合わせて、ポカラ市と、カウンターパートのホームさん、ジャナクさんが企画してくださいました。今回は、駒ヶ根友好公園とバシュンドラ公園に、合計で50本の桜を植栽してきました(図3～4)。植樹祭にはポカラの市長さんをはじめ、40人を超える参加者があり、われ先にとサクラの苗木を植えたがる無邪気な姿がありました。

サクラ・プロジェクトでは 今後も継続して、日本のサクラ苗の運搬や導入を続け、向こう5年で300本のサクラをポカラと遠隔農山村に植樹したいと考えています。ポカラや農村の小学校への無償提供や、トレッキング街道の街路樹などとして、桜並木を通じた環境への配慮と、文化的景観づくりを両立していきたいと思えます！



図1 サクラ苗の輸出手続きの様子



図2 ポカラ・ナーサリーで保管される桜



図3 植樹祭の様子



図4 植樹祭の様子



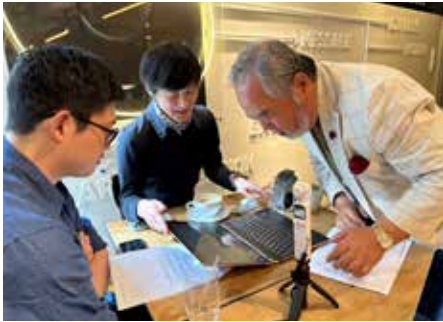
図5 ポカラ駒ヶ根友好公園の植樹地



図6 無事に育ってくれることを願って

総 会 報 告

2024 年度会員総会は、5 月 19 日早稲田にて開催されました。相馬会長、稲田理事、栗田監事、岡部さん、高橋さんが会場出席し、今橋さん、遠藤さん、アミナコレクション高野さん、黎華さんは ZOOM 参加でした。会員総会は成立し、議案はすべて承認されました。皆様、ありがとうございました。



NPO 法人ヒマラヤ保全協会 2024 年度 会員総会 議案書

第 1 号議案 2023 年度事業に関する事項〔事業報告〕

1. 現地での植林・生活林再生事業

Dawa 村、Bega 村の現状視察

ネパール 2023 年 9 月出張コロナ禍でストップしていたネパール、アンナプルナ・ダウラギリ地域の IHC 活動地を再び訪問調査することができました。今回は Dowa 村と Bega 村を訪問しました。この山村では 2016 年まで IHC が「ダウラギリ」プロジェクト・「ソルクーンブ」プロジェクトとして、植林や生活林づくりを通じた山村復興支援活動を 5 ヶ年計画で行っていました。

Dowa 村は Beni からジープで 3 時間、途中 2 か所で崖崩れに立ち往生しましたが、なんとか辿り着き、村のナーサリー管理人だったシェル・バハドゥール・ガルブジャーさんを探し、ミーティングできました。JICA 草の根プロジェクト (JPP) が 2016 年に終了した際に、村の大規模植林事業もひと段落を迎えました。植林地は山の傾斜地にネパールパイン、アメリカパイン、ハンノキなど、たくさん植林したという話で、むこうの尾根沿いに大きく育っている森が見えました。これから果樹など植えたいですか？と提案すると、やりたいけど、行政や村人の許可や、給料などが必要とのことでした。村のロケーションは悪くないし、村人の雰囲気もいいのですが、このままだと高齢化によって農業も衰えていき過疎化していきだけなのかもしれません。更なる支援の継続が必要かもしれません。



▲ Dowa 村の集落、傾斜地に家屋が並ぶ



▲山の尾根の植林地に森が育っていた



▲ナーサリー管理人のシェルさん

翌日、Dowa 村から Bega 村へは、深い谷があって山道では繋がっていないということなので、3 時間歩いて下り、カリガンダギ川沿いの幹線道路まで降り、更に 4 時間山道を登って Bega 村に辿り着きました。ネパールの移動はとにかくいつも大変です。

Bega 村の元ナーサリー管理人のデウ・バハドゥール・ガルブジャーさんを探して、なんとかみつけてミーティングできました。IHC の 5 ヶ年プロジェクトで、合計 80,000 本以上の苗を植林したとのことでした。ここからいろいろな村に苗木を持って行って植えたとのこと。植えた苗木も大きく育っている。植林で村を助けてくれて、ありがとうございましたとのことでした。

ネパール山村部の村人の高齢化、若者不足はとても深刻で、特に若者が海外に働きに出てしまうことが多いので、山村での人材の確保育成がこれからの IHC 活動の課題でもあるかもしれません。プロジェクトが終わった後でも、継続的に現地を訪れて顔を出し、関係を継続していくことが今度も必要と感じました。



▲ Bega 村に続く道



▲昔ながらの建物と暮らし



▲ナーサリー管理人だったデウさん



▲ベガコーラ診療所と小学校



▲集落の向こうの山に IHC の植林地が見える



▲ Dowa 村の集落、傾斜地に家屋が並ぶ

2. 新規レモン栽培による生活・収入向上アグロフォレストリー事業

バランジャ村でのレモン栽培

バランジャ村で 2022 年 9 月に植栽した、500 株のレモン栽培地を継続的に支援しています。その内およそ 0.68ha の水田をレモン栽培地に転用しています。現在は、1 年半ほどたっており、2026 年の収穫を目指しています。

総 会 報 告

3. ヒマラヤ保全協会 50 周年記念イベント

❖ヒマラヤ保全協会 (IHC) は、本年 2024 年度に設立 50 周年を迎えます。本会は、川喜田二郎先生が 1974 年に設立したヒマラヤ技術協力会 (ATCHA) を前身とし、キング・マヘンドラ・トラスト日本委員会 (1986 年設立) を合併する形で、1993 年に成立しました。IHC では、ロープラインやパイプラインによる水道設備の整備 (1974 年～) に始まり、自然力渡河船の開発 (1981 年～)、ボランティアツアー「山岳エコロジーキャンプ」(MEC) の開催 (1985 年)、苗畑 (ナーサリー) による稚幼木の育成 (1980 年代～)、ムスタン・エコミュージアムの開設 (1995 年～) など、さまざまな事業を実施してきました。本年は、これまで実施してきたプロジェクトを振り返り、フォローアップを加え、かつ新たなプロジェクトが始動します。

❖ IHC 写真・映像資料ヘリテージ・プロジェクト 2024 年 1 月～

ヒマラヤ保全協会 50 周年を機に、相馬拓也ラボに眠る古写真 (ネガ・ポジ) や映像資料 (8 mm フィルム、ビデオテープ) のデジタル化を進めています。これらのなかには、1974 年にシーカ村で撮影されたロープライン建設の様子モノクロ写真や 8mm ビデオが残されており、当会のみならず地理学研究史や、ネパールにとってもきわめて貴重な映像・写真資料が残されていました。写真だけでも数千枚があり、整備を進めてデジタルデータベース化を検討しています。

❖パウダル村チーズ工房訪問 2024 年 1 月～

今回の旅の目的のひとつに、パウダル村のチーズ工房の再生 & エンパワメントの実施を掲げています。このチーズ工房は 2000 年に計画が始まり、2 年間のチーズ職人さんの育成を経て 2002 年から本格的に稼働しました。このチーズ工房は、川喜田二郎先生が会長在任中 (お亡くなりになる 6 年前の 2003 年まで在任) に手掛けた最後の仕事であり、今日まで 20 年以上にわたり続いています。コロナ禍の 2019 年～2021 年は、村人がすべての乳牛を売り払ってしまったため、チーズ生産が停滞してしまいました。それでも、2022 年 6 月頃から、再び乳牛所有農家が戻りはじめ、現在は 10 名の農家さんから毎日ミルクを仕入れてチーズ作りを続けています。同チーズ工房は、マイクロファイナンスの仕組みを導入した事業でもあり、2 人のチーズ職人の給与以外の売り上げは、隣接する学校の予算に組み込まれる仕組みになっています。

❖ポカラのサクラ・プロジェクトの開始 2024 年 1 月～

IHC の 50 周年記念イベントとして、ポカラ市レイクサイドのポカラ駒ヶ根友好公園とバシュンドラ公園に、日本のサクラを植栽し、桜並木の整備を開始します。今後 5 ヶ年で 300 本のサクラ植栽を計画しています。日本を代表する花でもある桜の故郷は、ヒマラヤ山脈に起源するヒマラヤザクラ *Prunus cerasoides* (現地名: “パイユン”) が原種と言われています。この秋咲きのサクラが日本にたどり着き、千年以上のときを経て日本で 300 種類を超える品種に増えたと言われています。本プロジェクトでは公園の景観整備と同時に、ヒマラヤに起源する桜が日本で増やされ、その様々な品種、いわば一きょうだい桜一の「ヒマラヤへの里帰り」という物語も大切にしています。そのため、できる限り多くの品種を植栽し、桜が見つない日本とヒマラヤの数奇なご縁をたくさんの人に知ってもらいたいと考えています。

❖ポカラ新規ナーサリーの開設 2024年3月～

ポカラのレイクサイドで2つのホテル(Grand HolidayとHotel Orchid)を運営するジャナク・バハドゥル・カルキ(Janak Bahadur Karki)氏の協力を得て、ポカラレイクサイドに新規ナーサリーを建設しました。場所はHotel Orchid脇の駐車スペース(約40m²)を借り受け、稲田理事やジャナクさんとともに宅地整備を実施しました。ここで、桜苗や新規果樹苗などの育苗や栽培実験で、遠隔農村にもたくさんの樹木や果樹苗を届けたいと計画しています。

4. 日本国内事業の活動報告

4.1. 国際交流・理解促進事業

❖講演・学会発表

本年は、日本地理学会23年度春大会(3月19日開催)で「古写真でたどる川喜田二郎とヒマラヤ保全協会の50年史」のタイトルで、学会発表を行いました。日本文化人類学会24年度大会(6月15日開催)でも、「川喜田二郎の文化人類学とアクション＝リサーチ」のタイトルで、川喜田先生とIHCの足跡について振り返ります。

❖企業訪問

アミナ・コレクションさま、アムリターラさまを企業訪問してまいりました。本会の50周年記念事業のご報告と、継続的な支援のお願いをしてまいりました。

4.2. 国際協力イベントへの参加・広報活動・地球市民学習事業

❖ヒマラヤ保全協会・特任研究員制度

ヒマラヤ保全協会では、若手の研究者・社会起業家・実務家・大学院生などの育成を目的に、「特任研究員制度」を発足します。IHC理事による推薦と、理事会での承認を経て、IHC特任研究員として登録されます。研究員は1年ごとに更新され、最長3年間とします。ヒマラヤや社会起業に関心がある、環境保全に興味がある若者がいれば、会員のみなさまからもぜひご紹介ください。

第2号議案 2023年度決算に関する事項〔決算報告〕

10ページ「2023年度予算実績対比表および2024年度予算書」を参照してください。

総 会 報 告

第 3 号議案 2024 年度事業計画

1. ネパール現地での事業・活動計画

1.1. 植林・生活林再生プロジェクト

❖【パルバット郡】昨年に引き続き、IHC とゆかりの深いサリジャ村のフォローアップをすすめます。とくに、「サリジャ機織り工房」と「ロクタ紙漉き工房」を設備面などで支援します。また、新規性の高いリンゴ苗の要請があったため、果樹栽培を計画します。

❖【ミヤグディ郡】昨年度で予算上のサポートを終えたバランジャ村とジーン村でも、フォローアップ続け、植林事業および果樹栽培事業を推進していきます。両村は経験を積んだ苗畑管理人の技術の向上が見られるため、今後は果樹や花卉など新規栽培植物のパイロット栽培地としての役割を確立させていきます。

❖ダウラギリ地域～カリガンダキ溪谷で、既存のナーサリーのフォローアップに加えて、本会のこれまでの事業地の苗畑管理人を人的交流の一環として派遣し、事業を通して得た叡智の有効活用方法についても住民とともに学んでいきます。育苗技術の伝播や植林の大切さを広めるため、また熟練の苗畑管理人を派遣することによるコミュニティ間の交流を推進します。今期 2024 度の育苗数・植栽数は 10,000 本を目標とします。

1.2. 果樹栽培によるアグロフォレストリー

❖昨年に引き続き、バランジャ村のキウイとレモンの栽培試験区の整備を実施します。レモン栽培については、2026 年の結実・収穫に向けた準備を進めます。

❖サリジャ村やスワンタ村などで IHC 協力農家 10 世帯程度を募集し、果樹苗を無償で提供し、果樹(リンゴ、レモンなど)栽培適地の実験と、アグロフォレストリーの理解促進を進めます。

❖アカデミアでの人脈を活用し、JICA、日本大使館との連携をはじめ、ネパール現地の教育機関(トリブバン大学など)、ポカラ市役所、民間団体(NGO/NPO など)との関係を深め、現在の活動を農業支援・アグロフォレストリーとして深化させます。

1.3. ポカラ近郊ナーサリー運用と農業試験サイトの開設

本年より、ポカラのレイクサイド Orchid Hotel に新ナーサリーを開設しました。新ナーサリーでは、サクラやハナモモなどの接ぎ木苗を生産し、販売ベースにできるような体制を整えます。また、ポカラ近郊にも新たに農業試験サンプルサイトの設営を検討しています。新規作物・野菜・果物(トウモロコシ、シイタケ、ブルーベリー、梨、桃など)の種子を播種・栽培し、地域環境への定着について検証します。これら実験区での検証によって得られた結果にもとづき、あらたなプロジェクトの計画・立案に活用します。

1.4. 事業完了地のフォローアップ事業

❖ムスタン・エコミュージアムの支援

ムスタン・エコミュージアムは、ムスタン王国への外国人入境解禁(91年10月)とともに計画・始動し、1994年3月に「ジヨムソム地域開発センター」として開館しました。IHC(およびロータリークラブなど)で、総額2,000万円程度を投じて建設・整備を実施しました。ジヨムソムを訪れる日本人観光客は、必ず立ち寄る場所となっています。本年のIHC50周年記念事業として、同ミュージアムの設備面や人材交流面でのフォローを実施します。

❖パウダル村のチーズ工房支援

パウダル村では2000年代初めころに、チーズ工房を村人とともに設立しました。現在は、7頭の乳牛からとれた生乳で、チーズを作っています。チーズ工房の収益は、ほぼすべてがパウダル村唯一の学校に寄付されます。同村の学校は所属する教員の給与や設備などを自己資金でまかなうことが難しく、チーズ工房は貴重な収入源にもなっています。今後は、乳用種雄牛の提供、学校児童とのチーズ作りによるブランド化、都市部やホテルなどへの販路の拡大・確保など、IHCとして支援を提供したいと考えています。

❖スワンタ村のロープライン整備

スワンタ村は1970年代に、ロープラインが設置された場所であり、本会活動のいわば原点でもある土地です。この村ではいまでも2本のロープラインが現存しています。このうち1本はいまでも薪や飼料木の運搬に使用され全長はおよそ1,300mに及びます。現在の課題は、ワイヤーそのものよりも荷物の運搬に使う滑車が経年劣化しているとのことでした。そのため、IHCではこの2本のロープラインを整備し、ヘリテージとして後世に残していきたいと思えます。

❖シーカ村等の観光客へのアウトリーチ

シーカ村は1990年代に、集中的に植林活動を実施した場所です。現在は、カリガンダギ河からトレッキングを訪れる人々の中継地であり、多数の往来があります。今後はゲストハウスなどに、本会活動のパンフレットなどを置かせてもらい、IHCの40年間以上におよぶ活動を周知したいと思えます。

1.5. 科研費・助成金による広域ヒマラヤ地域～中央ユーラシアの調査研究

❖昨年度2021年4月～2025年3月まで、科研費基盤研究A「ヒマラヤの人と自然の連環：東西3地域の比較」(代表者：渡辺悌二・北海道大学教授)が採択され、分担者として24年度は研究費配分(40万円)を受けるとなりました。ヒマラヤ地域の学術研究にコミットしつつ、現地のニーズやエスノグラフィを正確に知ることで、今後の活動に活かせるようにします。

❖ネパールに加え、広域ヒマラヤに属するシルクロード諸国(キルギス、タジキスタン、ウズベキスタンなど)での自然科学・人文社会科学のフィールド調査を実施し、ヒマラヤ～中央ユーラシア地域の人々の暮らしと自然を包括的に理解することに努めます。

2. 日本国内での事業・活動計画

2.1. 国際交流・理解促進事業

❖第23回ネパール・ヒマラヤ山岳エコロジースクールについては、開催に向けた準備を進めます。

❖ヒマラヤ地域やネパール、山岳、環境保全、国際協力・交流に関心のある市民交流の場を設け、IHCの活動の普及と理解を促進します。

2.2. 国際協力イベントへの参加および広報活動、地球市民学習事業など

❖グローバルフェスタ 2024 度(10月)に出展し、本会の活動を広く一般の皆様にお伝えます。

❖現地・国内の活動はホームページで随時報告し、会報紙「シャングリラ」を年に2回発行します。

❖日本国内の山岳地方が直面している問題を調査し、途上国のフィールドでの問題解決の経験と成果を活かした国内・海外の双方向での活動の可能性を模索します。

2.3. 人材育成およびネットワーキング、奨学金・助成金事業の整備

❖ヒマラヤ保全協会・特任研究員制度ヒマラヤ保全協会では、若手の研究者・社会起業家・実務家・大学院生などの育成を目的に、「特任研究員制度」を発足します。IHC理事による推薦と、理事会での承認を経て、IHC特任研究員として登録されます。研究員は1年ごとに更新され、最長3年間とします。

❖ IHC 若手助成金制度

助成金事業の応募体制を整備し、若手研究者、実務者、社会起業家数名に対して、毎年少額(10~30万円)の活動費・助成金を支給する。将来的にIHCとの協働が可能な、若手研究者、社会起業家、実務家などを発掘し、ヒマラヤ地域にたずさわる人材の底上げを目指します。本会への活動の同行、業務の委託・割り当てなどを通じて、共同の可能性を模索します(京都大学、早稲田大学、筑波大学などでリクルート)。

❖ SDGs への共鳴

SDGsへの取り組みをするマルチステークホルダー(政府機関、企業、NGO、教育機関など)とのネットワーキングを重んじ、各セクターの得意分野を活かした課題対処法や取り組みへの学びを進めます。SDGsに向けた環境保全・地域振興のあり方に目を向け、産学官の様々な立場の人々との協働・共鳴によって、IHCが人+知識+機会、をつなぎ合わせるハブ機能の確立を目指します。

2.4. 学術研究面・政策提言

現地の現状や事業活動をアカデミックに調査・分析し、成果を査読誌や学会で発表します。地球人類が解決すべき喫緊の課題SDGsの理念のもと、政府機関、企業、大学、NGO、プロジェクト参画者などのマルチステークホルダーが集まり、今後の地球規模の問題解決のあり方を協議する交流会や勉強会などの場面に積極的に参画し、複数セクターが協働で活動する際に大切にすべき現地側の視点や活動を提言します。

総 会 報 告

上記事業計画に加え、現地ネパールの課題の発掘や要請に臨機応変に対応することで、IHC の在りプレゼンスを高めていきます。また、ヒマラヤ地域に限らず、広域ヒマラヤでもある中央ユーラシア諸国や日本が抱える環境問題、とくに SDGs への貢献を自覚し、本会の経験を活かす可能性について模索します。ヒマラヤ保全協会 (IHC) 創立者：川喜田二郎によるアクション＝リサーチの手法を基盤とし、つねに現地目線での国際協力とコミュニティ開発・興のあり方を追求して行きます。

第4号議案 2023年度予算

10 ページ「2023 年度予算実績対比表および 2024 年度予算 (案)」を参照してください。

謝辞

本年も会員の皆様のご支援のおかげで、現地での 2023 年度活動はほぼすべてのタスクを無事に終了することができました。本年は COVID-19 の影響をうけつつも、現地への渡航を再開させ、コロナ危機終了後の活動準備を、現地と着々と進めています。何卒、引き続き、ヒマラヤ保全協会の活動にご理解・ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第 2, 4 号議案
2023 年度予算実績対比表および 2024 年予算 (案)

2023年度 2023 年 4 月 1 日 ~ 2024 年 3 月 31 日
2024年度 2024 年 4 月 1 日 ~ 2025 年 3 月 31 日

科 目	2023年度予算	2023年度決算	2024年度予算
前期末残高	5,680,229	5,680,229	4,816,897
I 経常収益			
1. 受取会費			
個人会員会費	100,000	55,000	50,000
団体会員会費	60,000	30,000	60,000
2. 受取寄付金			
受取寄付金	900,000	468,152	1,000,000
3. 受取助成金等			
受取助成金	0	239,500	300,000
受取補助金	0	0	0
4. 事業収益			
自主事業収益	0	0	0
5. その他収益			
受取利息	0	29	0
為替差益	0	0	0
雑収益	0	0	0
経常収益計	1,060,000	792,681	1,410,000
II 経常費用			
1. 人件費			
給料手当	0	0	0
福利厚生費	0	0	0
2. その他経費			
現地活動・評価費	300,000	844,779	1,000,000
売上原価	0	0	0
旅費交通費	1,000,000	564,467	600,000
業務委託費	0	0	0
保険料	0	0	0
広報費	200,000	170,960	200,000
通信運搬費	50,000	18,595	50,000
消耗品費	5,000	0	5,000
事務用品費	30,000	2,420	30,000
図書資料費	0	0	0
諸会費	5,000	0	5,000
会議費	40,000	28,000	40,000
開発費	0	0	0
研修費	0	0	0
交際費	0	0	0
租税公課	0	0	0
支払手数料	5,000	4,390	5,000
水道光熱費	0	0	0
地代家賃	0	0	0
貸借料	0	0	0
為替差損	0	0	0
雑費	30,000	22,402	30,000
経常費用計	1,665,000	1,656,013	1,965,000
当期収支差額	△ 605,000	△ 863,332	△ 555,000
当期末残高	5,075,229	4,816,897	4,261,897

事

務

局

だより

ヒマラヤ写真便り

撮影 稲田 喬晃

ネパールで国内線の飛行機に乗る時には、なるべく窓側で山側の席に座ります。天気が良く運も良ければ、遠く連なるヒマラヤ山脈が雲間から輝いているのを拝むことができます。

飛行機の窓の外を流れていくヒマラヤの真っ白な神々の山嶺に、プロジェクトの無事と成功を祈り願ひ、ここからまた続いていく旅を想います。

(右写真)

(表紙写真：日本の桜苗を植樹する現地の子供たち)



寄付で支援する

100円で1本の木がヒマラヤに植えられます。

1口3,000円から何口でも結構です。

右記の振込み先にご送金ください。

■ みずほ銀行新宿南口支店

普通 2005209

NPO 法人 ヒマラヤ保全協会

マンスリーサポーターになる

毎月1,000円からマンスリーサポーターになることができます。

マンスリーサポーターの皆様には、「活動報告書 & 計画書」年1回)をお送りします。

■ 郵便振替

00100-0-709154

※銀行振込みをご利用いただいた場合は、ご氏名(ふりがな)とご住所を、e-mailにてご連絡ください。

会員になる

年会費：個人会員 5,000円・団体会員 30,000円

会員の皆様には、現地の活動が盛りだくさんの

会報『シャングリラ (Shangri-la)』をお届けします。

詳しくは、

NPO 法人ヒマラヤ保全協会のホームページをご覧ください。

100円で1本の木をヒマラヤに植えよう！ ご支援お待ちしております！

シャングリラ第115号 2024年8月31日発行
TEL: 080-3570-8458 e-mail: ihcjpn@ybb.ne.jp

編集・発行 NPO 法人 ヒマラヤ保全協会
ホームページ: <http://www.ihc-japan.org>